

日英語の無生物主語構文の認知メカニズム —認知文法と認知モードによる解法—

對 馬 康 博

1. はじめに

日本語と英語では言語類型論的・対照言語学的に言語体系が異なることが指摘されることが多い。例えば、国広(1974a)の日本語は「状況中心」、英語は「人間中心」、池上(1981)による日本語は「<なる>型の言語」、英語は「<する>型の言語」、Hinds(1986)の日本語は"situation focus"、英語は"person focus"、影山(1996)の日本語は「行為重視」、英語は「結果重視」などという指摘が格好の例であり、それぞれの研究で具体的な言語現象が観察されている。¹ このような日英語の相違を踏まえていくと、英語にはいわゆる「無生物主語構文」というものが存在することに気がつく。しかしながらこの構文は日本人の文法家が英語と日本語を対照した和書の英文法書では見かけることがしばしばあるが、英語だけを記述対象とした洋書の英文法書ではほとんどみかけることがない。現に Quirk et. al (1985)や Huddleston and Pullum (2002)などの大著の英文法書にも "Inanimate Subject Construction" (とでも訳せばよいのだろうか?) といった用語・項目は見つからない。そこでまずは、日本の英文法書の中で無生物主語構文と呼ばれている英語の事例とそれに対応する日本語の例を観察することからはじめてみたい。

(1) a. **This medicine** will make you feel better.

(=If you take this medicine, you will feel better.)

b. **A few minutes' walk** brought us to the park.

(=After a few minutes' walk, we came to the park.)

- c. **The bad weather** prevented us from leaving.

(=We could not leave *because of the bad weather.*)

- d. **This song** reminds me of my childhood.

(=When I hear this song, I am reminded of my childhood.)

(江川 1991: 25-26)

江川 (ibid.) は「無生物主語は意味の上では副詞節または副詞句の働きをしていることが明らかである」と述べ、(1)の無生物主語構文に対応する日本語を次のように記している。

- (2) a. この薬を飲めば、あなたは気分がよくなるでしょう。

- b. 数分歩くと、私たちは公園に出ました。

- c. 悪天候のために、われわれは出発できなかった。

- d. この歌を聞くと、私は子供のころを思い出します。

(ibid.)

江川の説明の妥当性は(1)に対応する日本語として、主語を無生物主語にした以下の直訳例が不自然であることから明確である。

- (3) a. ?? この薬はあなたに気分を良くするでしょう。

- b. ?? 数分の歩きが私たちを公園へ連れていった。

- c. ?? 悪天候がわれわれを出発することから避けた。

- d. ?? この歌が私に子供のころを思い出させます。

(著者訳)

また、安藤(2007)では無生物主語構文の解釈法を次のように説明をしている。

(4) 無生物主語の訳し方

- ① 無生物主語を副詞語句に変え、
- ② 人を表す目的語を主語にする。

Business took him to London.

(商用が 彼を ロンドンに連れて行った) ⇒

- ①
- ②

(商用で 彼は ロンドンへ行った)

- ①
- ②

(安藤 2007: 69)

この解釈法によると、上段括弧内の解釈よりも下段の方が自然な日本語であるということになる。

さらに、日英語の無生物主語構文に関しては文法家で一致した見解があるようなのでそれをみてみよう。

(5) a. 「英語には日本語にない無生物を主語にした構文がある」

(柏野 2010: 269)

b. 「無生物を主語扱いするのは日本語ではかなり異例のこと」

(安藤 2007: 68)

c. 「日本語では元来無生物主語の表現は好まれなかった」

(小島 1988: 192)

d. 「日本語の基本的他動詞は主語に関して選り好みをし、無生物主語を好まない傾向がある」

(国広 1967: 166)

e. 「日本語では人間または生物を主語とする場合に、英語では無生物を主語とする構文を使うことがよくある」

(江川 1991: 25)

f. 「英語は抽象的な概念にもく動作主性>を与え、主語にすることができるが、日本語ではそれを避けて副詞的・状況的に表現する」

(木村 1993: 90)

これらの引用からも明らかなように、無生物を主語とする構文は英語ではごく当たり前のものに対して、日本語ではそうする文（特に他動詞文）があまり一般的ではないという傾向が見えてくる。²

このような対照言語研究において、日本語の無生物主語をとる構文の不自然さに関しては言語学者が指摘するはるか以前の1905年日本文化研究家 Basil Hall Chamberlain 教授による *Japanese Thing* という書物(初版はもっと古いようである)の中で次のように述べられている。

- (6) Another negative quality (of the Japanese language) is that the habitual avoidance of personification—a characteristic so deep-seated and all pervading as to interfere even with the use of neuter nouns in combination with transitive verbs. Thus this language (= the Japanese language) rejects such expressions as "*the heart makes me feel languid*," "*despair drove him to commit suicide*," "*science warns us against overcrowding*," "*quarrels degrade those who engage in them*," etc., etc. One must say, "being hot, I feel languid," "having lost hope, he killed himself," "on considering, we find that the fact of people's crowding together is unhealthy," and so on—[...]

(括弧内は著者による補足)(Chamberlain 1971 [1903]: 276)

(日本語のもう一つの消極的な性質は、擬人法を習慣的に避けるということである。これは深く根ざした特徴で、あらゆるものに浸透しているから、他動詞と結びつけて中性名詞を用いることすら避けるようになる。だから日本語では「暑さが私をだるく感じさせる」とか、「絶望が彼を自殺に追いやった」「科学はわれわれに狭い所に多くの人間が住みすぎることを警告している」「喧嘩は、やる人の品性を落とす」などの表現を嫌う。このような場合には「暑くて私はだるい」「望みを失って彼は自殺した」「考えてみると、人間が大勢狭い所に住むのは不健康だ」などと言わなければならない。)

(高梨(訳) 1969: 19-20)

後の2.2節でも概観するように、無生物主語の解釈には「擬人法」(personification)が関与するとされているわけであるが、Chamberlain 教授は明治時代に既に日本語では擬人法を伴う無生物主語構文が不自然であることに気づいていたわけである。³

このように考えてみると「なぜ英語では無生物主語構文が自然であるのに、日本語では不自然なのか？」という疑問、さらに突き詰めて言えば、「なぜ英語では無生物主語構文の主語で表されるものが、日本語では副詞節・副詞句で表現されるのか？」という疑問が浮上してくる。そこで本稿ではこの疑問に関して、Ronald W. Langacker の「認知文法」(Cognitive Grammar)と中村(2003, 2004, 2006, 2008, MS.)の「認知モード」の観点から一定の解法を試みたい。第3節で詳しくみるように、これらのアプローチでは人間がどのように状況を捉えるのかといった事態把握、つまり、人間の認識作用が大いに意味づけに関与しているという立場をとる。これに従い本論では日英語における無生物主語構文の自然さの違いは我々の捉え方(construal)が関与していることを観察していくつもりである。

本稿の構成は以下の通りである。次の第2節では無生物主語構文の具体事例と定義を確認し、さらに先行研究を外観する。第3節では本稿の理論的枠組みとなる認知文法と認知モードを概観する。第4節では日英語の無生物主語構文に関する認知メカニズムを提案していく。第5節は結論である。

2. 無生物主語構文と先行研究

2.1 無生物主語構文とその定義

この節ではまず、無生物主語構文とはどのような構文であるのかということについて考察していく。吉川(1950: 19)は「英語では、物や抽象的な事がしばしば、be 以外の動詞の主語になる」と言っているが、この定義のままでは(7)のような他動詞文も(8)のような自動詞文も無生物主語をとっているという理由

だけで無生物主語の構文になってしまう恐れがある。

(7) My car has broken down again. (私の車はまた壊れた。)

(8) The sun rises in the east. (太陽は東から昇る。)

これらの英語の例は無生物主語ではあるものの、対応する日本語も無生物のままで良く、無生物主語構文という構文カテゴリーを敢えて設ける必要がないかのように思われる。⁴ また、中島・毛利(1957: 86)は「抽象名詞を擬人化した場合や、無生物が他動詞の主語となっている場合などあってこれらが無生物主語 (Inanimate subject) と呼ぶ」としている。この定義では「他動詞」という記述はしているものの、先ほどと同様にやはり精密な定義とは言えない。さらに次の定義をみよう。

(9) 無生物が主語になっている英語の表現一般ではなく、そのような表現のうち直訳的に対応する日本語の表現が不自然であるもの

(西村 1998: 136)

この定義ではこれまでのものと異なり、無生物主語構文という構文は日本語と英語を比較・対照してはじめて出現する概念であることがわかる。⁵ 先の第1節で、英語だけを記述対象とした洋書の英文法書では無生物主語構文という用語をほとんどみかけることがない旨を記したが、このためであると言うことができよう。本稿の以下の議論では上記の(9)の西村 (ibid.) の定義を採用し、これに合うものを「無生物主語構文」と呼び考察の対象としていくこととする。

さらに無生物主語構文の性質をみるために、次の例をみよう。

(10) a. What made you do that? (a'. Why did you do that?)

b. The news surprised me. (b'. I was surprised at the news.)

c. The No.11 bus will take you to Union Square.

(c'. If you take No.11 bus, you'll get to Union Square.)

(柏野 2010: 470)

柏野(2010: 469-470)によれば「主語にきている無生物が、動詞で示されている行為や出来事の原因や手段となっている」とのことである。⁶ 例えば、(10a, b)の無生物主語はその行為や出来事の「原因」として分析可能であろうし、(10c)であれば「手段」として分析できるであろう。さらに柏野(2010: 470)によれば、ネイティブ・スピーカーの直観として、(10a-c)の無生物主語構文は文体の点で堅苦しい書き言葉であり、(10a'-c')の人を主語とした構文よりも直接的であるという。人を主語とした後者は間接的で話し言葉に適しているとのことである。

以上、無生物主語構文とその定義について考察してきた。以下の節では無生物主語構文に関する先行研究を考察していく。

2.2 認知言語学的分析—西村(1997)の研究

この節では認知言語学に基づく無生物主語構文の先行研究として西村(1997)を考察していく。西村は特にその主語について着目し考察しているが、無生物主語構文の主語を考察する前に使役行為者という概念について確認する。

(11) プロトタイプのな<使役行為者>

「自らの力ないしエネルギーを、意図的にかつ自らの責任において、用いることによって、<対象>の位置ないし状態に何らかの変化を生じさせるという目標を達成する人間」

(西村 1997: 125)

認知言語学ではカテゴリーに分類していく能力を「カテゴリー化」(categorization)と呼び、あるカテゴリーで典型的な成員を「プロトタイプ」

(prototype)と規定し、そこから拡張していく成員を「周辺事例」(peripheral members)もしくは「拡張」(extension)と呼ぶ。従って(11)の定義は使役行為者カテゴリーの中での典型的成員のものということになる。

この定義に沿って西村 (ibid.) は無生物主語構文の主語を次のように定義づけている。

- (12) (A)「無生物主語」が自らの力ないしエネルギーを用いて行動し、(B) その結果、目的語で表現される人や物が特定の変化を被る

(ibid.: 140)

(11)のプロトタイプの使役行為者の定義と(12)の無生物主語構文の主語のそれとの主たる違いは少なくとも次の点である。すなわち、「人間」か「無生物」という違いであり、その違いがあるが故に「意図的にかつ自らの責任において」という記述の有無につながっているわけである。しかしながら、無生物主語は「自らの力ないしエネルギーを用いて行動し、目的語で表現される人や物が特定の変化を被る」わけであるから、(12)の定義とはある程度相関性があると考えられる。従って、カテゴリー化の観点からすれば無生物主語はプロトタイプのな使役行為者である人間主語と無関係であるというよりはむしろ、後者から前者が拡張した周辺事例であるとみなすべきだと考えられるのである。

このような拡張の方向性の一要因として西村 (ibid.) は「擬人化」(personification)を挙げている。⁷ 例えば、以下の(13)のように強風や地震のような自然現象というのは自発的に、自らの力ないしエネルギーを行使し、そのような力を我々に影響を与えるという主体として擬人化して捉えられているということであろう。

- (13) a. The blaze consumed almost 7,000 acres of central and northeast Florida, reducing dozens of homes to charred empty shells.

- b. In Afghanistan, at least 3,000, and perhaps as many as 5,000 people have been killed by an earthquake measuring 6.9 on the Richter scale.

(ibid.: 139)

以上、西村の研究はプロトタイプの使役行為者から無生物主語への拡張の方向性を示した大変有益な研究であると言える。しかしながら我々の疑問「なぜ英語では無生物主語構文が自然であるのに、日本語では不自然なのか？」というものや「なぜ英語では無生物主語構文の主語で表されるものが、日本語では副詞節・副詞句で表現されるのか？」というものに対しては直接的な解答を与えてくれていない。そこで次の節ではこの疑問を解決しようとしている斎藤(2001)のアプローチを概観したい。

2.3 語彙意味論的分析—斎藤(2001)

この節では日英語の無生物主語構文に関して語彙意味論の枠組みから分析を行っている斎藤(2001)を考察していく。この研究では「英語は結果重視指向、日本語は行為重視指向」という影山(1996)の主張に則り日英語の無生物主語構文の自然さ、不自然さを説明しているのである。影山(ibid.)による「語彙概念構造」によれば結果重視指向と行為重視指向は次のように定式化できる(太字はそこに焦点が当たっていることを示している)。

(14) a. 行為焦点: **X** CONTROL Y

 b. 結果焦点: X CONTROL **Y**

(影山 1996: 87)⁸

斎藤(2001)はこの定式に従って以下の英語の無生物主語構文(15a)の語彙概念構造を(15b)のように記述し、さらに日英語の無生物主語構文が成立するための必要条件について(16)のように定式化している。

(15) a. Hard work killed his father. (過労で彼の父は死んだ)

(斎藤 2001: 83)

b. [Hard work ACT ON his farther] CONTROAL [BECOME [his
father BE AT DEAD]]

(ibid.: 92)

(16) 無生物主語構文の必要条件：

結果状態が焦点化されているということ

(ibid.)

まず、英語は(14b)のように結果重視指向であり Y 部分に焦点が当たっているため、(15a)のような無生物主語構文の語彙概念構造は(15b)のように表示され、かつ焦点化される結果状態部分は太字で示されている。よって、(15)は(16)の必要条件を満たすため、無生物主語構文として成立するわけである。一方、日本語は(14a)で表示されているように行為重視指向であり X 部分に焦点が当たったため、(16)の必要条件を満たせず、無生物主語構文は成立しづらいと説明できるわけである。

しかしながら、斎藤 (ibid.) の議論には少なくとも大きく分けて2つの疑問点が浮上してくる。第一に、英語の無生物主語構文と対応する日本語表現に関してである。斎藤の議論では無生物主語構文の必要条件は示されており、我々の疑問の「なぜ英語では無生物主語構文が自然であるのに、日本語では不自然なのか？」というものには答えてくれそうである。ところが我々のもう一つの疑問「なぜ英語では無生物主語構文の主語で表されるものが、日本語では副詞節・副詞句で表現されるのか？」というものには斎藤の議論は答えを与えてくれない。事実、(15a)の英語の無生物主語構文に対応する日本語はその右隣の括弧内に記載されているが、英語では無生物主語で表現されているものが、日本語では副詞で表されている。しかし斎藤の議論ではこの点に関して触れられておらず、やはり疑問が残るのである。

第二に日本語の無生物主語構文に関してである。斎藤は(17a)のような日本語の無生物主語構文は(16)を満たさないため、容認性が下がると判定しているようだが、斎藤自身が認めるように(17b)のような無生物主語構文は容認可能であるということである。

(17) a. ?? その経験は私に人生の厳しさを教えた。

b. その経験は私に人生の厳しさを教えてくれた。

(斎藤 2001: 91)

斎藤は「くれる」という補助動詞が結果状態を焦点化する役割を果たしているのではないかと推測し、これにより(16)を満たすと考えられるため(17b)が容認されると考えているようである。しかし例文では語尾の助詞が「た」であり、これは「完了」アスペクトを表しているように思われる(cf. 益岡・田窪 1992: 108-110)。そこで(17b)と(18)を比較してみよう。

(18) a. ?? その経験は私に人生の厳しさを教えてくれる。

b. その経験は私に人生の厳しさを教えてくれている。

実際に(18a)のように「る」形で表示してみると(17b)よりも容認度ははるかに下がるように思われる。ところが、(18b)のように「ている」形で表示してみると(18a)よりも容認度があがると考えられる。この対立の理由を考えるために、中村(2004)が指摘する「ている」の用法をみてみたい。

(19) a. (いま夕食を) 食べている。(食べている最中)

b. (もう夕食を) 食べている。(食べてしまった後)

(中村 2004: 47)

中村 (ibid.) は「ている」用法には(19)のように「最中」と「終わりの後」の2つあることを指摘している。これを基に(18b)の「ている」の用法を考えてみると、(17b)のように「終わりの後」の用法に相当するのではなかろうか。つまり、この「ている」の用法は「た」と同様に「完了」アスペクトを表してると考えられるのである。このように(17b)と(18)を比較してみると、斎藤が説明するような「くれる」という補助動詞自体が結果状態を焦点化する役割を果たしているというよりも、明らかに「完了」アスペクトという機能が容認度判定の結果状態の焦点化を手助けしているように思われてくるのである。

では、補助動詞「くれる」(正確には完了の「くれた」や「くれている」)が付加されることで、なぜ無生物主語構文として容認度があがるのだろうか？ 先の節の西村(1997)の議論で見たように「くれる」は無生物の「擬人化」を促進しているからと考えることはできないだろうか？ つまり、何かを「くれる」という行為には必ず「与える人」、「もらう物」、「もらう人」という三項関係を伴うわけで、「くれる」のおかげで無生物が「与える人」の役割を果たすための機能を促進していると考えられるわけである。試しに「くれる」を『日本国語大辞典』で調べてみると、「人に物を与える。やる。」(ibid.:「くれる」頁)を歴史的に最も古い基本義として、さらに補助動詞として用いた場合には次のように記している。

- (20) 話者または話者側の者に対してなされた他者の行為の下に付けて、その行為が好意的になされたり、こちらに利益や恩恵をもたらしたりするものであることを表わす。感謝や懇願の意を含むことが多い。

(『日本国語大辞典』「くれる」頁)

つまり、「くれる」は元々人に物を与えるという意味であったが、それが文法化を経て、補助動詞として拡張していったとみなしても差し支えないだろう。さらに言えば、(18b)のような文は益岡・田窪(1992: 87)がいう(21)と同類の「受益の表現」に相当すると考えられる。彼らによれば「受益の表現とは、人が動

作・出来事から利益（好ましい結果）を受けることを表すものをいう」(ibid.)
ということである。⁹

(21) a. 花子は私に本を貸してくれた。

b. 鈴木さんは私に答えを教えてくれた。

(益岡・田窪 1992: 98)

このように考えると、無生物主語構文の語尾の補助動詞「くれる」自体が結果状態の焦点化ということを表しているというよりも、むしろ、無生物があたかも意志をもって「与える人」として解釈される、すなわち擬人化を促進する機能を果たしていると思なした方が妥当ではないであろうか。そして結果状態の焦点化というのは完了アスペクトの「た」や「ている」によってもたらされるものとして考える方が良いのではなかろうか。

以上指摘してきたように、斎藤(2001)の研究は日英語の無生物主語構文の必要条件を示したものであるが、疑問点もあることは確かである。

2.4 先行研究まとめ

これまで2つの先行研究について概観してきた。確かに無生物主語構文の無生物主語は西村(1998)が言うように「擬人化」として解釈されるということは確かであろうし、また、斎藤(2001)が言うように「英語は結果重視指向、日本語は行為重視指向」によって無生物主語構文の自然さが決まるということとは否定できないが、本稿の当該問題の「なぜ英語では無生物主語構文の主語で表されるものが、日本語では副詞節・副詞句で表現されるのか？」と疑問には答えられなく、故に発展的議論が必要である。そこで第4節では我々の認知の観点から考察し直すことで無生物主語構文の認知的動機付けを考え、我々の当該の疑問点の解決を試みたい。次の節では4節で用いる理論的枠組みを概観していく。

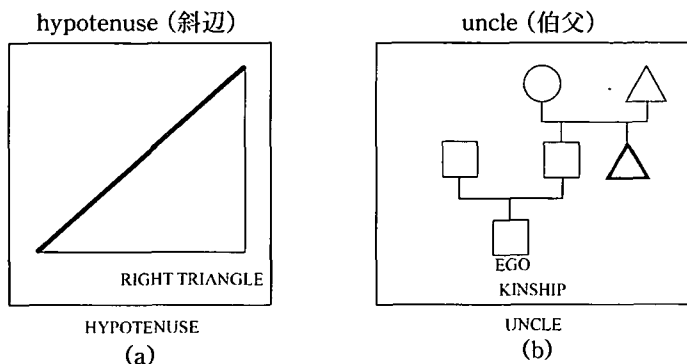
3. 理論的枠組み—認知文法と認知モード

第4節での具体的考察の前に、この節では理論的枠組みとして「認知文法」の際立ちという概念と「認知モード」について考察していく。

3.1 際立ち (prominence)

Langacker (1987a, 1991, 1999, 2008など)が提唱する「認知文法」(Cognitive Grammar)では、我々人間が事態をどう捉えるのか、つまり「捉え方」(construal)が意味づけと密接に関係するという立場をとる。従って、同じ状況でも捉え方が異なれば、その意味も異なるわけである。

我々の捉え方の一つに「際立ち」(prominence)というものがある。これは、我々がある状況の中である部分を選択(selection)し、その範囲(スコープ(scope))の中で際立つ実体(entity)を見いだしていこうとする、焦点調整(focal adjustment)のプロセスで生じる認知現象である。特に認知文法では際立つものを「プロフィール」(profile)、プロファイルを定義づけるのに必要不可欠な背景的要素を「ベース」(base)と呼ぶ。例えば、図1(a)の「斜辺」(hypotenuse)という概念は斜辺に際立ちがありプロファイル(図では太線で表示)されていると考えられているが、斜辺と呼ぶためには「直角三角形」という背景概念、すなわちベースが必須であると想定される。事実、直角三角形というベースがなければ、太線部分はもはや斜辺とは呼べずただの直線としか認識されないわけである。さらに、図1(b)の「伯父」(uncle)という概念も同様であり、そのベースには「親族関係」(KINSHIP)というベース、特に、私(EGO)の観点から見るのが必須である。

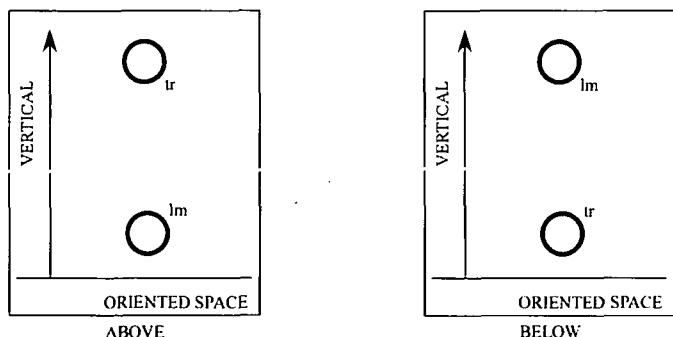


(Langacker 1986: 6)

図 1：プロフィールとベースの関係

さて、これまでプロフィールにはベースが伴うことを確認したが、認知文法ではさらにプロフィールの中でも最も際立つものを「トラジェクター」(trajector, tr)、二番目に際立つものを「ランドマーク」(landmark, lm)として区別する。例として、次の英語の前置詞 "above" と "below" の対比を考えてみよう。

- (22) a. The lamp is above the table. (ランプがテーブルの上にある。)
b. The table is below the lamp. (テーブルがランプの下にある。)

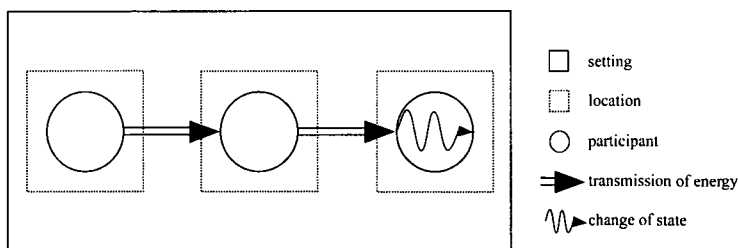


(Langacker 1987a: 219)

図 2：トラジェクターとランドマークの関係

図中の丸で示されている上下の実体 (entity) はどちらもプロフィールされているのだが、それぞれ tr/lm の配置が異なっている。換言すれば tr/lm 配置を除けば、物理的状况は同じものとなるわけである。この tr/lm 配置は物理的状况であらかじめ決まっているわけではなく、我々の認知の段階でどのように捉えるのかによって決まってくるわけである。"above" の場合、上の実体を tr とし、下の実体を lm として捉えれば、「tr が lm の上にある」という概念化へ至ることとなる。逆に "below" の場合、下の実体を tr として、上の実体を lm として認知すれば「tr が lm の下にある」という意味が概念化されることとなるわけである。

さらに、認知文法ではこのような tr/lm に基づく認知の仕方(以下、「tr/lm 認知」と呼ぶ)は「主語」や「目的語」といったいわゆる「文法関係」(grammatical relation)にも反映されると考えられている。この関係性を明らかにするために、まずは我々の事態認知の仕方について考えることから始めよう。我々は世界で生じる事態を認知しようとする際、力動関係(force dynamics)に基づいて「ある実体から別の実体へ力が流れ、力を受け取った実体は何らかの移動もしくは状態変化をする」といった認知の仕方をしていると想定される。認知文法ではこのようなモデルを「アクション・チェイン・モデル」(Action Chain Model)と呼び、以下の通り図式化される。



(Langacker 1987b: 383)

図3：アクション・チェイン・モデル

このモデルに基づき、「ある実体 (A) から別の実体 (B) へ力が流れ、力を受け取った実体 (B) が何らかの移動もしくは状態変化をする」という事態認知と主語・目的語の関係について考えてみよう。実体 (A) はいわば「力の源」(energy source) であり、最も際立つと考えられる。このため tr として認知されるわけであるが、これがいわゆる「主語」として見なされるものである。一方で、実体 (B) は「力の受け手」であり、「力のたまり場」(energy sink) であり、力の流れを考慮すると力の源よりは際立ちが低い、つまり二番目に際立つと考えられる。そのため lm として認知されるのだが、これが「目的語」という概念に相当するのである。この tr/lm 認知による「主語」と「目的語」の規定に基づいて、(23a) の例を検討してみよう。(23a) では、「Floyd がグラスを割った」という事態認知の概念化において、“Floyd” が「割る」という事態の力の源であり最も際立つので tr として認知され、故に主語として言語化される。他方、“the glass” はこの事態での力のたまり場、すなわち力を受け取り状態変化する実体であり二番目に際立つので lm として認知され、目的語として概念化されているわけである。

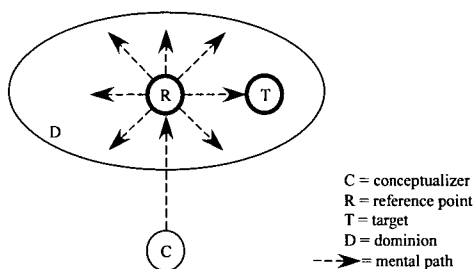
(23) a. Floyd broke the glass.

b. Floyd broke the glass on the table yesterday.

また、伝統文法でいういわゆる「副詞・副詞句」で表されるような概念は「セッティング (場)」(setting) や「ロケーション (場所)」(location) と呼ばれるもので概念化される。¹⁰ 図 3 で言えば、それぞれ実線の四角や破線の四角で表されているものに相当する。例えば、(23b) の下線部がそれに相当するが、“on the table” は字義通り物理的「場」を表しており、“yesterday” はメタファーにより拡張した抽象的「場」として捉えられるのである。

以上のように認知文法ではアクション・チェーン・モデルに基づき、tr/lm 認知により文法関係としての主語・目的語を規定していく立場をとるが、際立ちに関する別の現象として、図 4 のような「参照点構造」(reference-point

construction) という認知の仕方 (以下、「R/T 認知」と呼ぶ) がある。¹¹ 我々人間 (つまり、認知主体 (conceptualizer, C)) は何かを概念化する際、心の中で同定しやすく目立つ手がかりとなる点、つまり、「参照点」(reference point, R) を経由して同定しづらい「目標」(target, T) にアクセス、同定するという認知能力を持っている。



(Langacker 2008: 84)

図4：参照点構造

参照点構造を反映する例として、次の例を見よう。

- (24) a. 札幌駅のおみやげ屋さん
b. ?? おみやげ屋さんの札幌駅

まず(24a)の場合、認知主体(C)はある特定の「おみやげ屋さん」を概念化したい際、世の中にはこの種の店は多数あり、同定しづらい。そこで同定しやすくするために、手がかりとなる「札幌駅」を参照点(R)とし、目標(T)の「おみやげ屋さん」を同定していくというプロセスを用いるわけである。一方、(24b)のように本来は目立たないはずの「おみやげ屋さん」を参照点(R)として、それより目立っているはずの「札幌駅」を目標(T)とすると容認度がかなり下がってしまう。さらに次の例をみよう。

- (25) a. the boy's shoe, the cat's paw, the baby's diaper, the city's

destruction

- b. *the shoe's boy, *the paw's cat, *the diaper's baby, *the
destruction's city

(Langacker 2001: 18)

Langacker が指摘するように、(25)のように英語の所有表現において参照点 (R) と目標 (T) を入れ替えることはできない。このようにふつう所有表現以外でも参照点 (R) と目標 (T) は入れ替え不可能なのだが、この理由は参照点構造では次の「認知的際立ちの原理」(principles of cognitive salience) が機能していることから説明がつく。

(26) principles of cognitive salience

human > non-human; whole > part; concrete > abstract; visible
> non-visible; etc.

(Langacker 1993: 30)

この原理では不等号の左の要素の方がその右の要素よりも認知的に際立つということである。従って、参照点構造においても際立ちの関係に基づいて参照点 (R) と目標 (T) が決定されるため、この原理に相関して $R > T$ という関係が成り立つわけである。例えば (24) では「札幌駅」と「おみやげ屋さん」の関係を見れば、前者が「全体」(whole) であり、後者が「部分」(part) であるため、前者の方が後者よりも際立つ実体となるため参照点として機能する。よって本来は際立たない後者を参照点とすると不自然な表現となってしまうのである。同様に (25) では "boy" と "shoe" を見れば、前者は人間 (human) であり後者は非人間 (non-human) であるため前者が参照点として機能する方が自然であり、その逆は許されない。(25)の残りの例についても(26)の認知的際立ちの原理から同様の説明がつく訳である。

以上、認知文法の観点から、我々の捉え方が意味に反映されることを確認し、

その中でも特に際立ちに関する認知の仕方として、tr/lm 認知と R/T 認知を見てきた。

3.2 認知モード

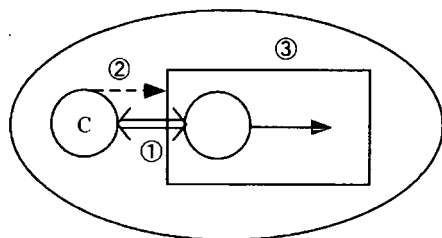
中村(2003, 2004, 2006, 2008, MS.)は「認知モード」という我々が認知する際の仕組みを提案している。認知モードには「I モード」(Interaction mode of cognition)と「D モード」(Displaced mode of cognition)が想定されている。この2つの認知モードは次のような特徴を持っている。

(27) 認知モード(I モード, D モード)の特性

- a. 認知主体と対象との主客未分の身体的インタラクションを基盤とする。
- b. I モードから D モードへの移行がある。

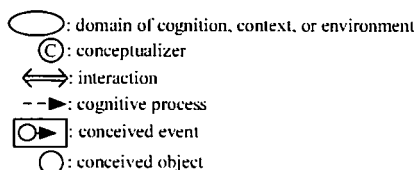
(中村 2008: 358)

まずはIモードから考察しよう。これには(27a)の観点が大きく関わってくる。中村(2008)は我々人間としての認知主体は単に何らかの対象を観ているのではなく、対象・環境とのインタラクションを通じて対象の認知像が形成され、世界を立ち上げていくと言う。ここで重要なのは、認知主体と世界との関係は最初からそれぞれ主体と客体として分離された状態ではなく、「主客未分」の状態、認知主体が対象・環境とのインタラクションを通じて、認知像を創造していこうとすることである。この認知過程を「I モード」(Interaction mode of cognition)と呼び、次のように図式化される。



(ibid.: 359)

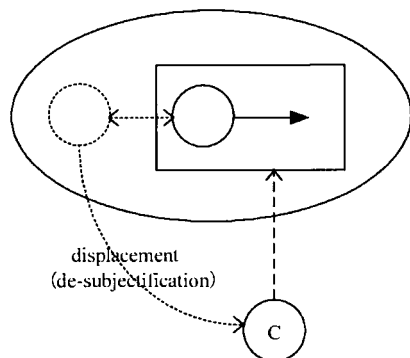
図5：Iモード (Interactive mode of cognition)



Iモードというのは図中でも①～③で示されているように3つの側面から形成されている。①として、両向きの二重線矢印はCとラベル付けされた円の「認知主体」と無印の円で示されている対象との不可分のインタラクションを示している。インタラクションを通じて②では、破線矢印で示される認知主体の認知プロセスが生じる。この認知プロセスに基づき③として対象を包含する四角で示されている「認知像」が立ちあがるのである。例として「太陽の上昇」という認知像を考えてみよう。まず①地球上の認知主体は太陽の位置とのインタラクションを行い、②そのインタラクションを通じて認知主体の認知プロセスとして視線の上昇が生じる。そしてその結果③「太陽の上昇」という認知像が立ち上がるのである（太陽の上昇とは天動説のように不動の地球に対して太陽が物理的に上昇するということはありません、あくまでも地動説に基づき自転を伴う地球上にいる認知主体の認知プロセスとして視線が上昇しているにすぎない）。

次に、Dモードについて考察する。これには(27b)の観点が関与する。先に見たようにIモードでは主客未分の状態で認知主体が対象・環境とのインタラクションを通じて認知像を立ち上げていくということは、図5では楕円で示さ

れている同一の認知の場にいるということである。換言すれば認知主体は「状況内視点」をとっているということである。このような認知の仕方が本来の姿なのだが、我々は認知の場からあたかも外に出て、外から客観的に眺めているような「気分」(中村 2008: 363)になることがある。いわば認知主体は「状況外視点」をとっているのである。このように認知主体が認知の場から「切り離され」(displaced)、外にいるような認知の仕方、つまり「脱主体化」(de-subjectification)したように感じられる認知の仕方が「Dモード」(Displaced mode of cognition)であり、これは図6のように図式化される。Dモードでは、認知主体は認知の場を離れて客観的に眺めている気分になっているため、①認知主体と対象・環境の直接的インタラクションはないように思われるし、②認知主体の認知プロセスを色濃く反映しているというよりは、客観的に舞台の外から眺めているように過ぎず、故に③認知像も認知主体から切り離された客体として存在しているように認知主体が感じているだけなのである。この客体としての認知像は「虚像」(中村 2008: 363)や「幻想」(中村 2004: 37-38)なわけである。例えば、「日が昇る」という事態も、認知主体は本来太陽とのインタラクションを通じて認知像を立ち上げているのに、認知主体はあたかも認知の場から切り離され、その事態を客観的に眺めているような気分になっているのである。



(ibid.: 363)

図6：Dモード (Displaced mode of cognition)

さて、ここまでIモードとDモードを概観してきたが、中村(2004, 2008)ではこの2つの認知モードの対立は日本語と英語の構文的特徴の対照と相同的である旨を述べている。特に、中村(2008: 370)では「Iモード型言語としての日本語・Dモード型としての英語」と述べ、また中村(ibid.: 371)では「日本語・英語はそれぞれIモード・Dモードを反映する言語の典型とみなすことができる」と述べており、さらに中村(ibid.: 364)では「一般に日本語より英語の方がDモードを反映する度合いが強い」と記している。これらの引用の中で特に注目すべきは「型」や「典型」や「度合い」という言葉である。つまり、中村は2つの認知モードと言語の関係の間に程度としての「度合い」を認めているということは心に留めておくべきことである。¹²

さらに、中村(2008)は認知モードと日英語の構文現象の対立を示す関係について詳細に論じているが、ここでは本論文で大きく関わるものとしてR/T認知かtr/lm認知かという観点について考えてみたい。中村(2003, 2004, 2008)によれば、Iモードでは一般的に事態や参与体(participant)をR/T認知で捉えるが、Dモードでは通常は事態や参与体をtr/lm認知で捉えるという。先に見たように日本語はIモードを反映する程度が高いためR/T認知をすることになるが、英語はDモードを反映する程度が高いためtr/lm認知をすることになる。これに関してより詳細に考えると、Dモード型の英語では認知主体は状況外視点から実体と実体の際立ち関係を見いだすためtr/lm認知をすることとなる。しかし、Iモード型の日本語では認知主体はtr/lmのような実体間の際立ち関係を見いだすよりも、状況内視点でまずは際立つ実体として参照点Rにアクセスし、それを手がかりに次の実体の目標Tを追っていくという様に、R/T認知しているわけである。このような認知の仕方と関連する構文現象の対立として「主語」と「題目」(topic)という概念が挙げられるが、英語は「主語優先」言語であり、日本語は「題目優先」言語であることは良く指摘されることである。例として次の対立をみよう。

- (28) a. My guitar broke a string.
 b. The stove has blown a fuse.
- (29) a. *私のギターが弦を切った。
 b. *その加熱器がヒューズを飛ばした。
- (30) a. 私のギターは弦が切れた。
 b. その加熱器はヒューズがとんだ。
- (31) a. *My guitar, a string broke.
 b. *The stove, a fuse has blown.

(中村 1998: 256、一部改変)

(28)の英語では tr/lm 認知に基づき2つの実体間に際立ち度を見いだすことで全体・部分関係が生まれるが、そのうち「全体」を tr として「主語」で、「部分」を lm として「目的語」で他動詞文として言語化したものであると言えるが、それに対応する(29)の日本語はおかしい。一方、(28)と同じ状況を表現するためには日本語では(30)のように自動詞文などで表現すると自然であるが、対応する英語 (31)は不自然である。Langacker (1993など)は「題目」を参照点として分析するが、「～は__が」構文では題目に当たる「～は」は参照点(R)として、「__が」がその目標(T)として分析される。これに従うと、日本語では「～」に当たる「全体」をRとして認識し、「__」に当たる「部分」をTとして認知していることとなる。

以上、2つの認知モードとそれが反映する英語と日本語の構文現象の例について概観したが、次の節では日英語の無生物主語にはIモードとDモードが深く関与していることを考察したい。

4. 無生物主語構文の認知メカニズム

この節では、無生物主語構文の認知メカニズムについて考察していく。まず

4.1節では英語の無生物主語構文の主語に生起するモノには2タイプあることを指摘し、さらにその認知構造について考えていく。次の4.2節では英語の無生物主語構文の事態認知構造について考察する。最後に4.3節では日英語の無生物主語構文を対照し、それに関わる認知メカニズムを解明していく。

4.1 英語の無生物主語構文における2種類の主語とその認知構造

この節では英語の無生物主語構文について考察していく。まずは実例から考察しよう。

- (32) a. **The new contact lenses** made the girl blink her eyes much more than usual.
- b. **This bus** will take you to our school.
- d. **This white line** will lead you to the doctor's office.
- e. **The check** spares us the trouble to paying in cash.
- f. **This pamphlet** will give you a good idea of how the temple is constructed.
- g. **The scholarship** enabled her to study in England.
- h. **What** brought you to Japan?
- i. **Bad weather** prevented the guests from coming here.
- j. **The mere sight of the blood** made him sick.
- k. **His failure in business** left him penniless.
- l. **Tom's late arrival** made his boss upset.
- m. **A glance at the machine** told me that there was something wrong with it.
- n. **A year in Paris** will cost you a lot of money.
- o. **The heavy snowfall** caused the trains to be stalled.

(太字は著者による)(荒木 1997: 490-492)

荒木 (ibid.) では特に場合分けされず実例のみが数多く提示されている印象を受けるが、本稿ではこうした事例には大きく分けて2つのパターンがあるということを指摘したい。

それを考察する前に、まず池上(2006)にて英語の無生物主語構文の主語の解釈について概観する。次の例をみよう。

(33) [必ず効くと思われる薬をもってきて]

a. "This medicine will make you feel better."

b. 「この薬で気分がよくなるでしょう。」

(34) [間違いなく問題のドアを開けられる鍵を持ってきて]

a. "This key will open the door."

b. 「この鍵でドアが開くでしょう／ドアを開けられるでしょう。」

(池上 2006: 163)

池上 (ibid.) によれば(33a)では "medicine" という<モノ>が主語として立てられているが "medicine" という語で実際に意図されている意味は(あなたが)この薬を飲むという<コト>として解釈も可能であるという趣旨を述べている。また、(34a)では "key" が<コト>より<モノ>であるという解釈がしやすいと述べている。つまり、池上の指摘をまとめると、

(35) 無生物主語構文の主語の解釈：

i. <コト>として解釈

ii. <モノ>として解釈

という2種類があることとなる。ではなぜこのような2種類の解釈が可能なのであろうか？池上 (ibid.) ではこの疑問に関しては答えを明言していないのだが、本稿では次のように考えていくことが可能であるということを主張したい。面白いことに、日本語では(36)の古語辞典の定義の通り<コト>と<モノ>

>を区別し別々の語で表しているのに対して、英語ではどちらも(37)の英英辞典の定義のように日本語の<コト>と<モノ>の概念を "thing" 一語で表してしまうのである。

- (36) コトが時間の経過とともに進行する行為をいうのが原義であるのに対して、モノは推移変動の観念を含まない。

(『岩波古語辞典増訂版』「もの」の頁)

- (37) You can **thing** to refer to any object, feature, or event when you cannot, need not, or do not want to refer it more precisely

(COBUILD³ "thing" の頁)

日本語では辞書の定義に従えば、<コト>が時間の推移を含むのに対して、<モノ>はそれを含まない。英語ではCOBUILDのthingの定義で言えば、"object" が<モノ>に相当するであろうし、"event" が<コト>に当たるように思われる。つまり、日本語では<コト>と<モノ>を明確に区別しているのに、英語では<モノ>という概念も<コト>という概念も一語の "thing" で表せるということはあまり明確には区別していないということであろう。¹³ ところが、英語に関して Jespersen は面白いことを指摘している。彼は "Junction Virtually Nexus" という用語を用いて次の例について説明している。

- (38) a. Too many cooks spoil the broth. (The meaning is 'the fact that the cooks are too many, etc.')

- b. No news is good news.

(下線は著者による)(Jespersen 1984[1937]: 42)

この例では下線部の名詞が本来はジャンクションでありながら、ネクサスと解されるものであることを物語っている。ここで、ネクサスとジャンクションに

ついて定義を見ておく。

- (39) [...] we find that the former kind (=Junction) is more rigid or stiff, and the latter (=Nexus) more pliable; there is, as it were, more life in it. A junction is like a picture, nexus is like a drama or process.

(括弧内は著者による)(Jespersen 1964[1933]: 95)

この引用から明らかなように、ジャンクションとは「一枚の絵」のようであり静的なものである。一方、ネクサスとは「ドラマやプロセス」のようであり動的であるということである。つまり、ネクサスとジャンクションはちょうどそれぞれ日本語の<コト>と<モノ>に相当すると思われる。(38a)では "Too many cooks" は名詞句でありながら、Jespersen が 'the fact that the cooks are too many' と記しているように、「料理人が多すぎる<コト>」という意味である。また、(38b)も「ニュースがない<コト>」である(事実、「料理人が多すぎる<モノ>」も「ニュースがない<モノ>」という表現はおかしい)。

では、なぜ英語では名詞句で<モノ>と<コト>というどちらも表現可能なのであろうか？これに関して、次の引用が参考になる。

- (40) 英語では「こと」を表現するときにも、その「～が～する(こと)」の中から、「～が」の部分抜き出して、「もの」のように表現してしまう

(葛西 2003: 149)

- (41) 英語はむしろ<もの>を<こと>から取り出して露呈する。

(池上 1981: 258)

これらが物語っていることは英語は「<コト>の中から<モノ>を抜き出す」傾向性があるということである。つまり<コト>が「全体」、その構成物としての<モノ>が<部分>を表していると考え、図7のように英語は「全体」状況、つまり<コト>のプロファイルから「部分」としての<モノ>へとプロ

ファイルが移行していると考えられるのである。このようなプロフィールの移行という現象は「換喩 (メトニミー) (metonymy)」と呼ばれる現象と密接に関係がある。¹⁴ そして Jespersen が指摘するように、〈モノ〉の中に〈コト〉を読み込むということ、(38)の例で言えば、それぞれ "Too many cooks" と "No news" という〈モノ〉で〈コト〉を表しているということは、メトニミー的に部分としての〈モノ〉で全体状況としての〈コト〉を表していると考えられる。Langacker (1993など) はメトニミーを一般的認知能力としての参照点能力というから説明しているわけであるが、図8のようにこの場合にも〈部分〉としての〈モノ〉がそれ以外の要素よりも認知的に際立つことにより〈全体〉状況としての〈コト〉の目標 T を同定するための参照点 R として機能していると考えられる。¹⁵

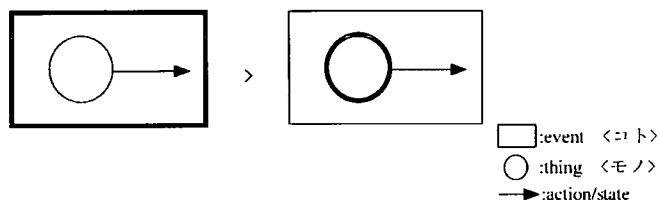


図7：〈コト〉から〈モノ〉へのプロフィールの移行

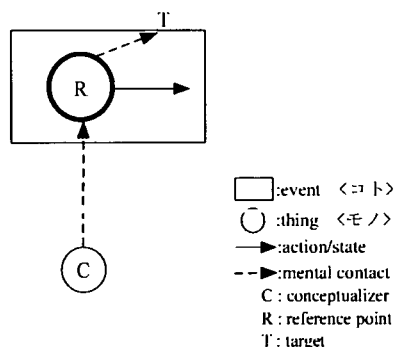


図8：部分としての〈モノ〉で全体としての〈コト〉を表す
メトニミーの参照点構造

以上の観点から無生物主語構文の主語に着目して考察してみたい。例として無生物主語構文(32a-f)の例を(42a-f)として再掲して考察していく。

- (42) a. **The new contact lenses** made the girl blink her eyes much more than usual.
 b. **This bus** will take you to our school.
 c. **This white line** will lead you to the doctor's office.
 d. **The check** spares us the trouble to paying in cash.
 e. **This pamphlet** will give you a good idea of how the temple is constructed.
 f. **The scholarship** enabled her to study in England.

((32a-f)を再掲)(太字は著者による)(荒木 1997: 490-492)

(42a-f)の太文字部分の無生物主語、「コンタクトレンズ」「バス」「白線」「小切手」「パンフレット」「奨学金」は<モノ>もしくは<モノ>らしいものとしてみなされるものである。しかし、これらは完全に他から独立した概念的に自律(conceptually autonomous)したものだろうか?本稿で主張したいことはそうではなく、この無生物主語は概念的に依存的(conceptually dependent)なものであるということである。では、無生物主語は何と依存的かということと目的語位置で言語化されるモノ(多くは「人」と依存的であるということである。換言すると、無生物主語のモノは目的語のモノと「関係」(relation)があるということである。認知文法ではこのような関係概念を表す名詞を「関係名詞」(relational noun)と呼ぶ。関係名詞とはそれ自体はモノ(thing)をプロフィールしており tr として認識されるものであるが、同時にプロフィールされていない lm とみなされる別の名詞概念を含む関係を表す名詞のことである(cf. Langacker 1990: 124-125, Taylor 2002:209-210)。¹⁶ 例えば (42a)では、「コンタクトレンズ」は人が使用するものであり、使用者としての人との関係を切り離すことはできない。ここではコンタクトレンズは目的語位置の「少女」と

の関係を表す関係名詞である。さらに(42b)では「バス」というのは人が乗るものであり、乗客を切り離すことはできない。また、(42c)の「白線」も人を導くために引かれたものであり、人と関係があると考えられる。(42d)では「小切手」は人が所有するものであるし、(42e)の「パンフレット」は人に案内するものである。さらに、(42f)では「奨学金」も人が借り受け使用するものなわけである。このことをまとめると、「無生物主語構文の主語は目的語位置で生起する名詞(モノ)と何らかの関係を表す関係名詞である」ということになる。

以上の線に沿って、さらに無生物主語と目的語位置で生起する名詞の関係を突き詰めて考えてみたい。(42a)ではコンタクトレンズと彼女の関係、すなわち、「彼女がコンタクトレンズを使用する<コト>」という関係であり、(42b)ではバスとあなたの関係、つまり「あなたがバスに乗る<コト>」という関係を表しているわけである。さらに、(42c-f)ではそれぞれ「白線に沿ってあなたが歩く<コト>」、「私たちが小切手を使う<コト>」、「このパンフレットをあなたが利用する<コト>」、「奨学金を彼女が使用する<コト>」が想定される。すべてに共通していることは無生物主語と目的語名詞句は<コト>の関係を意図しているということである。¹⁷ 換言すれば<コト>を表しているということは「ネクサス」の関係を築いているというわけである。以上のことをまとめると(43)のようになる。

(43) 無生物主語構文の主語と目的語の関係：無生物主語構文の主語と目的語は<コト>の関係、つまりネクサス関係にある

ここで面白いことは、無生物主語と目的語は<コト>の関係、すなわち、ネクサス関係を示しているというわけであるが、先に見たように無生物主語は<モノ>として考えられ、これは図7でみたように<コト>の中から<モノ>を取り出すという認知操作、つまり、メトニミーによる<全体>から<部分>へのプロフィールの移行が行われているということである。換言すると図8で考察

したように<部分>である<モノ>で全体状況である<コト>を表していると考えられるわけであり、参照点構造が関与しているわけである。つまり、認知的に際立っている<モノ>を参照点 R としてそれを無生物主語として言語化し、<全体>状況としての<コト>としての目標 T にアクセスしているわけである。

さらに、本稿では無生物主語構文の主語にはもう一種類存在することを指摘したい。(32h-o)を(44a-h)として再掲する。

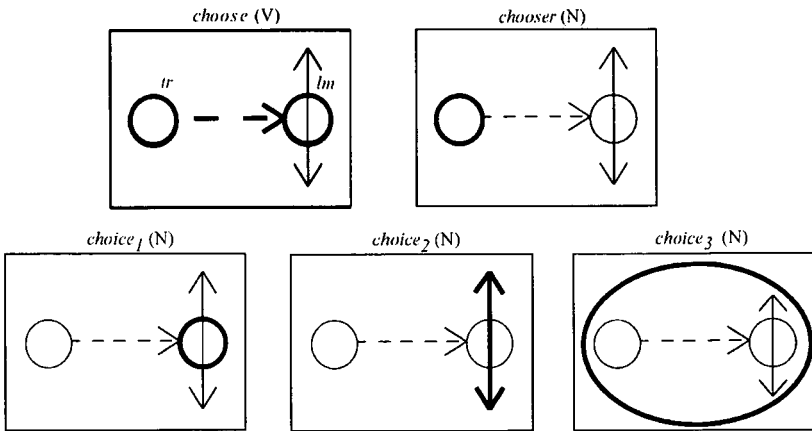
- (44) a. **What** brought you to Japan?
 b. **Bad weather** prevented the guests from coming here.
 c. **The mere sight of the blood** made him sick.
 d. **His failure in business** left him penniless.
 e. **Tom's late arrival** made his boss upset.
 f. **A glance at the machine** told me that there was something wrong with it.
 g. **A year in Paris** will cost you a lot of money.
 h. **The heavy snowfall** caused the trains to be stalled.

((32h-o)を再掲)(太字は著者による)(荒木 1997: 490-492)

(44b-f)の太字部分の無生物主語、「悪天候(天気が悪い<コト>)」「血を見る<コト>」「事業での失敗(彼が事業に失敗した<コト>)」「トムの遅延(トムが遅れた<コト>)」「機械を見る<コト>」「パリでの一年(パリで一年過ごした<コト>)」「激しい降雪(雪が激しく降った<コト>)」は<モノ>というよりも<コト>としての解釈の方が優勢に思われる。これは先に見たタイプのように、<部分>-<全体>に基づくメトニミー的ではなく、むしろ、<コト>全体を<モノ>化するという認知操作、つまり「実体化」(reification)が関与していると考えられるのである。しかし、ここで面白いのは、完全に<モノ>として認識されるのではなく、<コト>的な<モノ>であるということである

(cf. 池上 1989)。例えば(44c, d, e, f, h)の例は「派生名詞」(derived nominal)の例であり、まさしく時間的プロセスを表す動詞から時間概念を超越したモノを表す名詞への実体化の良い例であるが、同時にそこにはベースとしてプロセスを残しているのである。¹⁸ よって対応する日本語でも<コト>として解釈した方が自然である(「血を見る<モノ>」「彼が事業に失敗した<モノ>」「トムが遅れて着いた<モノ>」「機械をみる<モノ>」「雪が激しく降った<モノ>」などはやはり据わりが悪い)。また、(44b)では"weather"は派生名詞ではないが、同じように「天気が悪い<コト>」というネクサス関係を表していると考えられる。さらに、(44f)では"a year"と言え、そこには365日という毎日の時の流れが感じ取られ、「パリで一年過ごした<コト>」として解釈されるわけである。また(44a)はwhat自体は<コト>としても<モノ>とも解せるが、やはりここでは<モノ>というよりも<コト>として解した方が自然である。もちろん、このタイプの無生物主語も関係名詞である。換言すれば、これらは先にみた Jespersen の "Junction Virtually Nexus" として解釈できるものであり、1つめのタイプと同様にこのタイプも主語と目的語は何からかのネクサス関係があるわけである。例えば、(44f)では「パリで一年過ごした<コト>」は目的語位置で生起する名詞の「あなた」と関係しているわけであり、「あなたがパリで一年過ごした<コト>」と解されるのである。

さて、ここまでの議論は無生物主語構文の主語には2種類あり、一つはメトニミーで<モノ>で<コト>として解せるもの、もう一つは<コト>全体を<モノ>化しつつも<コト>として解せるものである。本稿ではこの2つの無生物主語の解釈はこの構文に特異なものではなく、むしろ英語全般に共通することであることを主張したい。そこでそれを考えるために、まずは英語の語の例として次の図と共に動詞 "choose"、名詞 "chooser"、名詞 "choice" を認知文法の観点から見てみたい。



(Langacker 2008: 100)

図9：choose, chooser, choice

まず動詞 "choose" は「選択する」という事態を表しており、選択者と選択物をそれぞれ *tr*, *lm* とし、破線で示されているそのプロセスもプロファイルされているため、これらが太線で示されている。次に名詞 "chooser" とは「選択者」であり、それがプロファイルされており太線で示されているが、他のものはプロファイルされていないがそのベースには存在するため細線で示されている。さらに、"choice₁" とは「選択物」を示しており、それがプロファイルされている。また、"choice₂" では「選択の範囲」を示しており、それを示す縦線の矢印が太線でプロファイルされている。最後に "choice₃" では「選択する<コト>」全体を表す派生名詞であり、その事態の全ての実体をベースとして背景化し、その代わりに全体を囲む領域をプロファイルすることで実体化しているものである。このように、これら全ては個別に意味が異なるものであるが、面白いことに、全てに共通していることはベースが同じであるということである。換言すると、同じベースでもどこがプロファイルされているのかということによって品詞や意味が異なっているわけである。

同様のことが2つのタイプの無生物主語構文でも言える。これらのタイプの無生物主語の部分だけを取り出し認知構造を図示すると次のように表すことが

できる。

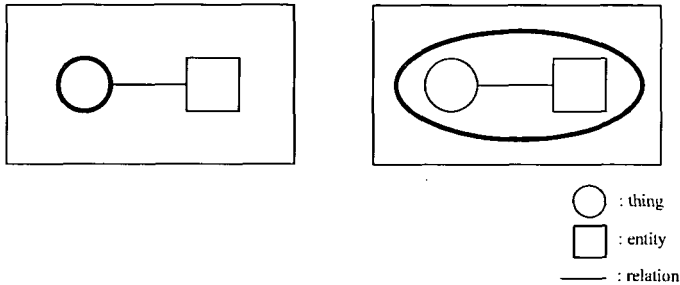


図10：英語の無生物主語構文の2つのタイプの主語の認知構造

まず、図中の丸と四角の組み合わせは関係を表しており、無生物主語構文で言えば、無生物主語が目的語とネクサス関係を表す関係名詞であることを表している。外側の長方形は状況全体としての<コト>を表している。先にみたように、一つ目のタイプは認知的に際立っている<モノ>を参照点Rとして無生物主語として言語化し、<全体>状況としての<コト>を目標Tとしてアクセスしているわけである。これは一種のメトニミーであり、<部分>である<モノ>で全体状況である<コト>を表していると考えられるわけである。ここで興味深いのは、先の "choose" と "choice₁" の例と平行して、出来事、つまりネクサスという<コト>がベースにありつつも、プロフィールされているのはその中の<モノ>だけであるということである。このため左図中では最も際立つと考えられる丸で示された<モノ>が太線でプロフィールされていることを示している。次に、もうひとつのタイプは<コト>全体を<モノ>化するという認知操作、つまり「実体化」(reification) が関与していると考えられるが完全に<モノ>として認識されるのではなく、<コト>的な<モノ>であるということである。したがって右図中では、"choice₃" と同じように出来事全体を楕円の丸で囲むことで実体化していることを表しているが、1つ目のパターンと同様にベースにはネクサスという<コト>があるということである。このように2つのタイプいずれにおいても<コト>がベースにありつつも、その中から

認知的に際立つものを参照点 R として<モノ>を取り出したり、<コト>全体を<モノ>化するという実体化といった認知操作が無生物主語構文の主語の認知的動機づけとなっているわけである。2つのタイプにはこのような違いはあるにせよ、いずれにしても無生物である<モノ>もしくは<モノ>化したものを主語に立てているという点では同じである。この共通点に関する認知メカニズムは4.3節で論じたい。

この節では英語の無生物主語構文の主語には2種類あることを指摘し、それぞれを動機づける認知メカニズムを考察してきた。

4.2 英語の無生物主語構文の事態認知構造

この節では4.1節の議論に基づいて、英語の無生物主語構文の事態認知構造について考察していく。英語の無生物主語構文の主語には2タイプあるわけであるが、いずれの場合においても、そのベースとして主語名詞句と目的語名詞句にネクサス関係があることは既に確認した。本節ではさらに議論を発展させ節全体の解釈を考えることから始めてみたい。まずは1つ目のタイプとしてみた(42a, b)を例として考えてみよう。(42a)では「彼女がコンタクトレンズを使用する<コト>」というネクサス₁が生じ、その原因の結果「彼女は瞬きをいつも以上にする<コト>」というネクサス₂が生じると分析可能である。同様に、(42b)では「あなたがバスに乗る<コト>」というネクサス₁という手段の結果「あなたは我々の学校に着く<コト>」というネクサス₂が生じるとみなすことができるわけである。また次に2つ目のタイプとして(44b, c)を例としてみてみよう。(44b)では「客が悪天候に遭遇した<コト>」というネクサス₁が原因となり、その結果「客はここにやってくることができなかった<コト>」というネクサス₂が生じると分析できる。また(44c)では、「彼が単に血を見た<コト>」というネクサス₁が原因で、その結果「彼は気分が悪くなった<コト>」というネクサス₂が生じると想定できる。これらをまとめると英語の無生物主語構文の事態認知は次のように分析できる。

- (45) 英語の無生物主語構文の事態認知：主語名詞句と目的語名詞句で表されるネクサス₁が原因・手段となり目的語名詞句がある状態に至るか行為を行うというネクサス₂が生じるという事態¹⁹

ここで(45)の事態認知に従って2つのタイプの英語の無生物主語構文の事態認知構造について考えてみよう。その事態認知構造は次のように図示可能である。

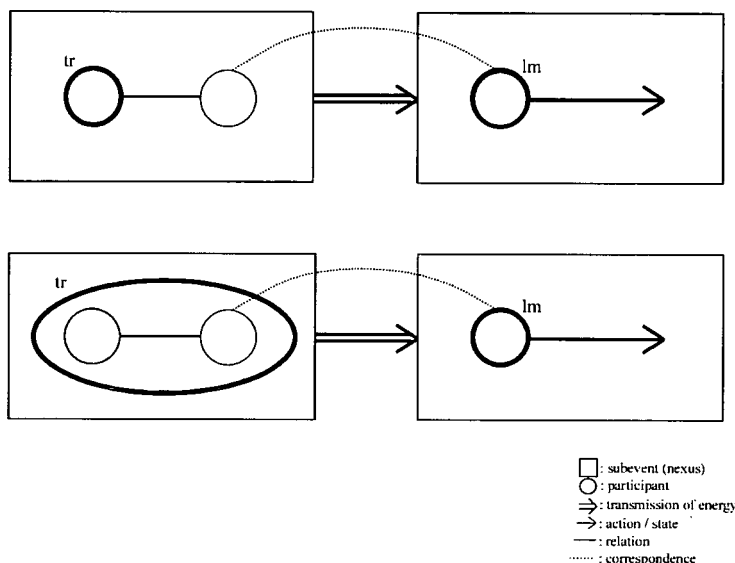


図11：英語の無生物主語構文の事態認知構造

この図の上段が前節でみた1つ目のタイプであり、下段が2つ目のタイプに相当する。(45)に従えば、ネクサス₁が原因・手段となってその結果ネクサス₂が生じるということは、この2つのネクサス間には何らかの力の流れ、つまり、力動関係(force dynamics)が感じ取られる。そのため、図中では太線の二重矢印付き線でその関係を示している。また無生物主語は認知的に最も際立ちが高くプロファイルされるため、太線で示されさらに tr がラベル付けされている。また目的語は二番目に際立ち高くプロファイルされるため、太線で示され、さ

らに *lm* が添えられている。また目的語は何らかの状態に至るか何らかの行為を行うため、太線の矢印付き線でそれを表している。ここで興味深いことは、ネクサス₁とネクサス₂のどちらにも共通して、目的語名詞句が関与しているということである。ネクサス₁とネクサス₂ではそれらは同一指示なため、それを示すために点線で対応関係を示している。ただし、目的語名詞句はネクサス₁とネクサス₂の中ではそれぞれ際立ち度が異なっているため線の太さで区別している。ネクサス₂では目的語名詞句は節全体で *lm* の働きをして太線で示されているようにプロファイルされているわけであるが、ネクサス₁ではプロファイルされていないため細線で示されている。なぜネクサス₁ではプロファイルされていないかと言えば、これは主語名詞句が関係名詞であることに起因する。前節でみたように、関係名詞というのはそれ自体は *tr* として *thing* をプロファイルするが（よってこの図では節でも *tr* としてプロファイルされ太線で示されているが）、プロファイルされていない (*unprofiled*) *lm* を（ベースに）含むものとして定義されているためである。

このように考えてくると、英語の無生物主語構文というのはネクサス₁とネクサス₂の関係性から生じている構文、すなわち、1つの節中に2つの出来事 (*event*) が構造的に圧縮されている構文と考えられるわけである。こうした現象は「統語の圧縮」(*structural compression*) (Leech 1974) と呼ばれるものであり、その定義は以下の通りである。

- (46) [...] that (= the effect) of *structural compression*, that is, of reducing complexity of constituent structure, in terms of number of elements and depth of subordination [...].

(括弧内は著者) (Leech 1974: 193)

([...] 統語の圧縮、すなわち、要素の数と従位関係の深さに関して構成要素構造の複雑さを減ずること [...])

(安藤(訳) 1977: 211)

ここで統語の圧縮の観点から(1)の例を再掲して考察してみよう。

(47) a. **This medicine** will make you feel better.

(=*If you take this medicine, you will feel better.*)

b. **A few minutes' walk** brought us to the park.

(=*After a few minutes' walk, we came to the park.*)

c. **The bad weather** prevented us from leaving.

(=*We could not leave because of the bad weather.*)

d. **This song** reminds me of my childhood.

(=*When I hear this song, I am reminded of my childhood.*)

((1)を再掲)(江川 1991: 25-26)

江川 (ibid.) は太字の無生物主語をイタリックの副詞節・句でパラフレーズされるところとしているが、上掲(45)や図11の無生物主語構文の事態認知構造に基づけば、無生物主語構文には2つのネクサス、つまり出来事が「圧縮」されているため、それを拡張すると2つの節となることや、1つの節中でももうひとつの出来事を副詞句で言語化することは自然な説明がつくわけである。さらに次の例をみよう。

(48) a. The No.11 bus will take you to Union Square.

b. If you take No.11 bus, you'll get to Union Square.

((10c, c')を再掲)(柏野 2010: 470)

第1節で見たように、柏野(2010: 469-470)によればネイティブ・スピーカーの直観として、(48a)の無生物主語構文は文体の点で堅苦しい書き言葉であり、(48b)の人を主語とした構文よりも直接的であり、人を主語とした後者は間接的で話し言葉に適しているとのことであった。これも統語の圧縮の観点からすれば、(48a)の無生物主語構文は2つのネクサス関係が圧縮されているが故に

その関係が「直接的」に感じとられるということになろうし、また(48b)の人を主語とした構文はネクサスが圧縮されているというよりも、無生物主語構文ではネクサス₁で表わされるべきものがこの構文では副詞節で表されており、ネクサス₂で表されるものは主節で言語化されているため、圧縮感が感じ取られず「間接的」に感じられるのであろう。²⁰

以上、この節では英語の無生物主語構文の事態認知構造について考察してきた。2.3節の先行研究で概観したように、斎藤(2001)は無生物主語構文の必要条件として語彙概念構造の観点から単に「結果状態が焦点化されているということ」と主張していたわけであるが、(45)の英語の無生物主語構文の事態認知と図11の事態認知構造は我々の認知の観点から考察することで、より踏み込んだ自然で包括的な認知的動機付けが可能となったわけである。

4.3 日英語の無生物主語構文の認知メカニズム

先の4.1節及び4.2節では英語の無生物主語構文の主語の2種類とその認知構造、そして無生物主語構文の事態認知構造について議論してきた。この節では日英語の無生物主語構文の認知メカニズムについて考察していく。

まずは日本語の無生物主語構文について考えてみたい。(1)や(47)の英語の訳例として、対応する日本語の事例を考察してみよう。先にみた(2)と(3)をそれぞれ(49)と(50)として再掲する。

- (49) a. この薬を飲めば、あなたは気分がよくなるでしょう。
 b. 数分歩くと、私たちは公園に出ました。
 c. 悪天候のために、われわれは出発できなかった。
 d. この歌を聞くと、私は子供のころを思い出します。

((2)を再掲) (江川 1991: 25-26)

- (50) a. ?? この薬はあなたに気分を良くするでしょう。
 b. ?? 数分の歩きが私たちを公園へ連れていった。

- c. ?? 悪天候がわれわれを出発することから避けた。
- d. ?? この歌が私に子供のころを思い出させます。

（(3)を再掲）（著者訳）

英語では(47)のように無生物主語構文で表現するものを対応する日本語でも無生物主語構文を用いて(50)のようになると容認度はかなり低いように思われる。ところが、(49)のように英語では無生物主語で表すものを副詞化して表現すると完全に容認される文となる。まずはこの認知的理由について考えてみたい。3.2節で概観したように、日本語ではIモードとして「主客未分」である状態の中で認知主体は「状況内視点」をとり対象・環境とのインタラクションを通じて客体としての「出来事」を認知像として立ち上げてこうとする。Iモードを高く反映する日本語では個々のモノとモノの関係性を見て tr/lm を規定しようとする tr/lm 認知ではなく、まずは認知的に際立つものを参照点 R として手がかりとし、目標 T にアクセスしていこうとする R/T 認知が優勢である。日本語ではこの認知に基づきまずは何を参照点 R とするのが鍵となるが、認知主体は状況内視点（状況に埋没した視点とも言い換えられるが）をとっているということは、まず、認知主体は環境とのインタラクションを行い、自らが置かれている状況を把握した上で、その状況内で対象としてのモノとのインタラクションをとろうとするわけである。そこでまずは環境とのインタラクションを通じて状況を確認し、それを参照点 R として言語化しようとするわけである。先に見たように、状況というのは「場」(setting)として言語化されるものであり、通常は「副詞」として記号化される。そこで英語の無生物主語構文には二つの出来事（つまり、ネクサス₁とネクサス₂）が関与していることをみたが、このうち日本語ではネクサス₂を引き起こす原因や手段となるネクサス₁を状況と捉えそれを「場」として「副詞」で言語化するというわけである。換言すると、認知主体は状況であるネクサス₁を参照点 R として、ネクサス₂の出来事を目標 T としてアクセスしていくわけである。さらに次の段階として認知主体はネクサス₂の構成物としてのモノとインタラクションを行う

わけであるが、目標 T となったネクサス₂の中では再び R/T 認知に基づき、"principles of cognitive salience" のうち人間が非人間より認知的際立ちが高い (human > non-human) という原則に基づき、人間を参照点 R とし、「題目」(topic) (多くは「ハ」格でマークされる) 部分で表し、その「述部」としての「評言」(comment) を目標 T とし認知し、言語化していくわけである。

以上のことを基に認知モードの観点から英語の無生物主語構文に対応する日本語表現の認知メカニズムについて考えてみよう。

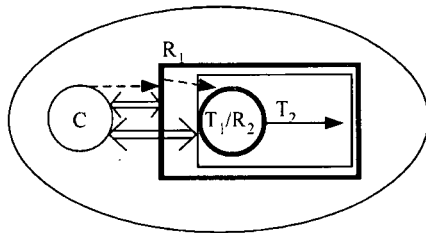


図13：英語の無生物主語構文に対応する日本語の認知メカニズム

まず認知主体 C は状況を設定するために環境とのインタラクションを行う。この様子は認知主体 C と太線四角で示されたものの間に存在する短い矢印付き二重線で表されている。そしてそのインタラクションを通じて、認知主体 C は（英語では無生物主語で表される）ネクサス₁で表される状況を参照点 R₁として心的アクセスをするという認知プロセスが生じる。このプロセスは認知主体から出ている矢印付き破線で示されている。また、状況は「場」として捉えられるので、この時点で日本語では副詞節・句として言語化されることとなる。次に、認知主体 C は参照点 R₁で設定された状況内の「場」の領域 (dominion) 内で目標となる T₁にアクセスする。これにより認知主体 C は指定された状況内で対象となる T₁とのインタラクションが可能となる。この様子は認知主体 C と T₁との間に存在する長い矢印付き二重線で表されている。認知主体 C はこのインタラクションを通じて細線四角で囲まれた認知像を立ち上げていくわけである。この対象としての T₁は通常日本語の「題目」として言語化される

実体である。このようにして同定された T_1 それ自体が今度は際立ちをもってその「述部」としての「評言」の T_2 を同定するための参照点 R_2 として機能するという認知プロセスが生じるわけである。このプロセスは太線四角から出ている矢印付き破線で示されている。日本語では認知主体 C はこのような R/T 認知に基づき、次々と認知的に際立つ参照点 R ・目標 T を追う、つまり「参照点構造の連鎖」(reference-point chain) (cf. Langacker 1997) という認知の仕方を行うわけである。よって、この後考察するような英語の場合のように認知主体 C が tr/lm 認知に基づきネクサス₁とネクサス₂を状況外の視点から見つめ、その間に関係性を見いだすような無生物主語構文とは認知メカニズムが異なるため、日本語では(50)のような無生物主語構文の容認度はきわめて低いわけである。

こうした認知モードが反映された日本語の例として(49a)を取り上げてみよう。認知主体 C はまず環境とのインタラクションを通じてネクサス₁の「この薬を飲む」という状況としての参照点 R_1 を確立しそれにアクセスするという認知プロセスが生じる。そしてその後、その設定された状況内でネクサス₂の内部にある目標 T_1 となる「あなた」という対象にアクセスを通じて、認知主体 C はその対象とのインタラクションを行う。そして今度はそれを参照点 R_2 としてそれを陳述する「気分がなくなる」という評言の目標 T_2 へ至るという認知プロセスが生じるわけである。このような I モード的認知の仕方が英語の無生物主語構文に代わる日本語の言語表現に色濃く反映されているわけである。

次に英語の無生物主語構文の認知メカニズムについて考察してみよう。英語は D モードを高く反映する言語であるため、認知主体 C はあたかも認知の場から離れた自己が客観的状況としての出来事を眺めている気分となる認知の仕方をする。換言すれば認知主体 C は「状況外視点」をとるため、状況から離脱して主客が分離した状態で外から舞台上を観察し、<モノ>と<モノ>の力動関係に基づき tr/lm 認知をしていくわけである。 tr/lm 認知をするためにはそこに力動関係に基づく何かしらの力の流れ (energy flow) を意識するため、

生物であれ無生物であれ、力の源となるものを優先して認識しようとする傾向があるわけである。²¹ よって英語では無生物から人間に力の流れが感じられれば、無理なく無生物を tr、つまり主語として言語化し、人間を lm、すなわち目的語として言語化することが可能である。このようなメカズムは次のように図示することができる。尚、ここでは英語の無生物主語構文の主語には2つのタイプが存在するためそれらを区別し、図11でみたそれぞれの事態認知構造と認知モードを融合した形で示している。

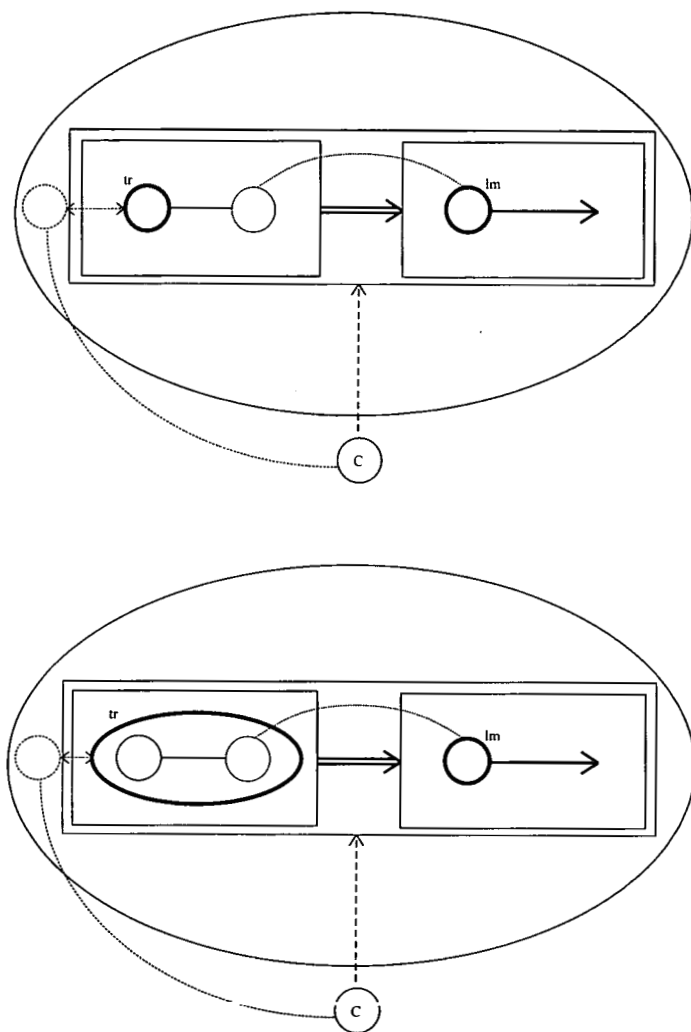


図14：英語の無生物主語構文の認知メカニズム

この図式は本来は認知主体 C が状況内で対象とのインタラクションを行っているはずであるが、認知主体 C は外側の楕円で示されている認知の場から離脱し、状況外から観ている気分になっていることを表している。図中では楕円内で本来の認知主体の位置を点線の円で示し、また本来の対象・環境とのインタラクションも点線の矢印付き線で示されている。また認知主体 C は状況外にいる気分になっていることを示すために楕円の外側で実線の円で示され、あたかもそこから見つめていることを示すために矢印付き破線でそれを表している。認知主体 C は状況外から見つめることで、〈モノ〉と〈モノ〉の関係や〈コト〉と〈コト〉の関係を見つめ、そこに力動関係を見出し tr/lm として認知しているわけである。このような認知の仕方の結果として (45) と図 11 で見た英語の無生物主語構文の事態認知構造が動機付けられているわけである。

このように I モードと D モードという認知モードの反映として英語と日本語を対照分析することで、我々の抱いた疑問、「なぜ英語では無生物主語構文が自然であるのに、日本語では不自然なのか？」と「なぜ英語では無生物主語構文の主語で表されるものが、日本語では副詞節・副詞句で表現されるのか？」という疑問に対してこれまでの議論から自然な解答を与えることができたわけである。第 1 節ではじめに見たように英語は「人間中心」、日本語は「状況中心」と良く指摘されるのは認知モードによる tr/lm 認知・R/T 認知と相関しているわけである。²² 最後に英語の無生物主語構文の存在意義について考察してこの節を締めくくりたい。次の引用を見よう。

- (51) a. この構文 [= 無生物主語構文] の特徴は、無生物を擬人化によって〈行為者〉(agent) にし、英語で愛用される SVO の文型を貫徹しようとしている点にある。

(大括弧内は著者による補足)(安藤 2007: 69)

- b. 英語では生物でも無生物でもとにかくつかまえて主語に押し込んでしまうと言える状態であるが、これは英語において「((主語+述

語))文型」が非常に強く確立していることを示している。

(国広 1967: 166)

このような指摘は以前からされてきたわけであるが、この理由は我々の議論で見てきた認知モードの観点から説明できるわけである。つまり、英語はDモード認知を高く反映しており、認知主体は状況外から実体と実体の間に力動関係を見だし、tr/lm認知をする傾向が高いからである。

以上のように認知モードの違いが英語の無生物主語構文の自然さ、日本語のその不自然さに反映しており、このような観点から考察することで、人間の認知に根ざした自然で包括的な説明が可能となったわけである。

5. 結 論

本稿では日英語の無生物主語構文を対照し、その違いを認知の観点から考察してきた。まず、英語の無生物主語構文の主語には部分としての<モノ>で全体状況の<コト>を表すメトニミーに基づくタイプと<コト>全体を<モノ>化するタイプがあることを考察し、さらにその認知構造を考察した。次に本稿では英語の無生物主語構文の事態認知は「主語名詞句と目的語名詞句で表されるネクサスが原因・手段となり目的語名詞句がある状態に至るか行為を行うというネクサスが生じるという事態」であることを提案した。最後に日英語の無生物主語構文の認知メカニズムについて考察した。具体的には英語において無生物主語構文が自然であるのは認知モードとしてのDモードが高く反映されているからであり、日本語ではこの構文が不自然で、むしろ英語では無生物主語で表現するものを日本語では副詞という「場」で表現するのはIモードが高く反映されているためであった。本稿では認知文法や認知モードの立場から無生物主語構文をアプローチしたが、これにより上掲のことが人間の認知の観点から包括的かつ自然に説明することが可能となったわけである。

<注>

¹ 国広(1971)は対照言語学というのは言語学と文化人類学にまたがるとして「比較言語人類学」という用語を用いているが、本論文内で数々の言語学者によって言及されている英語と日本語の相違点は、Nibett (2003)をはじめ、よりマクロの視点の文化人類学的観点からも同様の指摘がなされていることは注目に値する。

² もちろん、日本語でも自動詞文の場合にはごく当たり前に無生物が主語となる。例えば、「木が倒れた。」「地震が起こった。」「太陽は東から昇る。」「その車は猛スピードで目の前を駆け抜けていった。」などがその例に当たる。こうした日英語の言語体系と無生物主語・人間主語の関係を詳細に論じたものに西光(2010)があるので参照のこと。

³ さらに、国内でも英語の無生物主語に関して夏目漱石は自著の『文学論』の中で次のように述べている。

- (i) [...] 投出的解釈を受けるものは皆具体的の物体に限られしが、更にこれを推して抽象的事物に及ぼす時、果たして如何ほどの効果を収め得べきかは、多少の研究に値するところなるべし。元来余は所謂抽象的事物の擬人法に接する度毎に、その多くの場合がわざとらしく気取りたるに頗る不快を感じ、延てはこの語法を総じて厭ふべきものと断定するに至れり。

(夏目 2007: 20)

「投出」とは人間外のものを人間として擬人化して解釈するということであるが、漱石が述べるように、具体的な無生物はそのような解釈が可能であるが、抽象的な無生物(例: "Pity cries"(ibid.: 21))はそのような解釈をしづらいということになる。

⁴ 単に「擬人化」(personification)の事例として片付けてしまえば済むことであろう。

⁵ このことは安藤(1986)が無生物主語構文に関して「表現構造の比較」という

章で論じていることから明らかであろう。また、江川(1991)は無生物主語構文を「日本語と異なる名詞の用法」という節を設けて論じており、これも日英語の比較・対照を通じて論じている証拠となるであろう。さらに江川 (ibid.) は同節内で「名詞構文」という構文を設けているがこれも英語と日本語の比較を通して初めて出現する構文名で英語のみを記述対象とした文法書ではほとんどこの名称を見かけることはないことも注目に値する。

⁶ 国広(1967: 147-167)も参照のこと。そこでは無生物主語の意味機能を詳細に分類している。

⁷ 同様の議論は Lakoff and Johnson (1980: Chapter 7) でもなされている。

⁸ 影山(1996: 85-86)では、英語と日本語を統一的に説明するためには CAUSE という表示を用いると矛盾が発生するとして CONTROL という表示を用いるとしている。ここでいう CONTROL とは次の意味で用いられている。

(ii) X CONTROL Y

= X が Y の成立を直接的に左右する。

CONTROL は「Y の成立を直接的に左右する」という程度で、必ずしも Y の成立を含意するわけではない。もし Y の成立が含意されれば、CONTROL は実質上、CAUSE という意味に解釈されるが、もし Y の成立が含意されなければ、Y は「目標」という程度に解釈される。

(ibid.: 86)

⁹ 久野(1978: 152-159)は「視点」理論から日本語の補助動詞「くれる」について詳細に分析しているので参照のこと。

¹⁰ location は setting の下位区分としてみなされるが、詳しい相違点については Langacker (1991: 300)を参照のこと。

¹¹ 参照点構造を司る認知能力として「参照点能力」(reference-point ability) (cf. Langacker 1993) があり、他の一般的認知能力よりも重要なものとして注目される (cf. 山梨 2000: 85-86) ことがあるが、本論文では便宜上「際立ち」に関

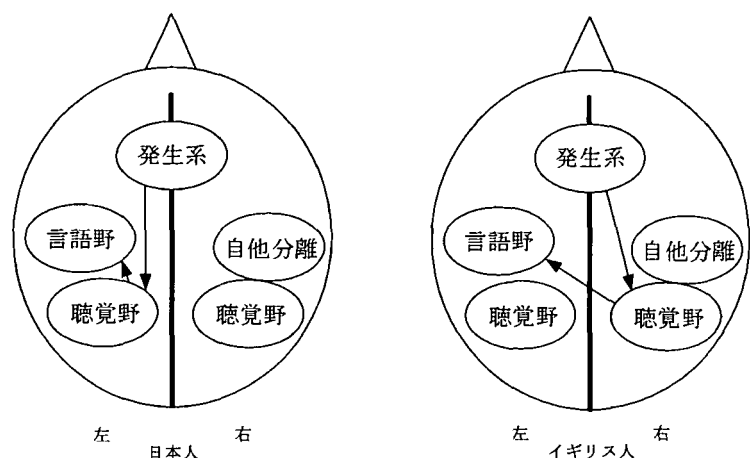
する現象として同一に考察していく。

¹² 以上の認知モードに関して、中村(2004, 2008)では学的根拠として哲学的根拠を挙げている。ここでは認知科学的根拠としての脳科学的根拠として著者が思うところのIモードからDモードへの移行という認知処理(cognitive processing)の根拠について指摘しておきたい。なお、ここでの議論は濱田(2010)の議論を大いに参考に行っている。そこでは認知モードと脳科学の接点を詳細に議論しているので是非ご参照いただきたい。

著者は脳科学的視点から次の引用が参考になるのではないかと推測する。合わせて下の図も参照していただきたい。

(iii) 日本人は発話開始時には、母音を左脳の聴覚野で内的に聴くので、その隣の言語野が瞬時に動き出すことで認知から言語へと連続的に移行する。かつ、右脳の自他の分離を担う部分である下頭頂葉と上側頭溝(聴覚野の隣)を刺激しないので人称代名詞を発声することがあまりない。これに対して、イギリス人は、発話開始時には、母音を右脳の聴覚野で内的に聴くので、右脳から左脳の言語野に神経信号が伝達するのに時間がかかり、時間的空白が生じる。それゆえ、認知から言語へと連続的に移行できなくて、かつ、右脳の自他の分離を担う部分である下頭頂葉と上側頭溝(視聴野の隣)を刺激するので人称代名詞等を発声してしまう。

(月本 2008: 193-194)



(ibid.: 193)

図：脳内での認知処理過程

この引用から言えることは次のことである。日本人が母語である日本語を認知処理する際、認知から言語へと連続的に移行するため、認知の過程で、認知主体が主客未分である状態で対象とのインタラクションを通じて得る反応をあたかも感じたそのままに言語化してしまいやすいということであろう。よって日本語はIモードを色濃く反映した認知処理をしているというわけである。主観述語（「痛い!」「寒い!」など）が格好の例となろう。他方、イギリス人が母語である英語を処理する際、時間的空白が生じ、認知から言語へ連続的に移行できない。このタイムロスのために認知主体が自他分離を脳内で処理し始め、あたかも主客を分離してしまう（displacement）という認知操作が働いた上で、場面から離れたような気分となっている認知主体が舞台上で起っている状況を捉えることで言語化が生じやすいということであろう。よって英語はDモードの程度が高く反映されているわけである。また、人称代名詞の発声の有無は、英語は必ず主語を明示しなければならない言語であるのに対して、日本語は必ずしもそうではないということにも繋がってくる。詳しくは月本 (ibid.) を参照していただきたい。

¹³ <コト>と<モノ>の区別に関しては葛西(2003)で詳細に議論されているので参照のこと。

¹⁴ メトニミー (metonymy) (換喩) とは近接性 (contiguity) に基づく比喩のひとつで、「やかんが沸いた。」という表現においては実際にはやかんの中の「水」を示しているという例などが挙げられる。Langacker (1993など) はメトニミーを参照点構造という一般的認知能力から説明し、認知的に際立つもの(「やかん」)を参照点として言語化し、実際に意図しているのはその目標として(「水」)であると分析し、言語表現と実際に意図している指示対象との乖離 (discrepancy) の問題を解決している。

¹⁵ ここで、<部分>を参照点 R とし<全体>を目標 T と分析するのは、一見すると3.1節の「認知的際立ちの原理」(principles of cognitive salience) に違反するように思われるが、<部分>の方が認知的に際立つと判断されれば自然な認知の仕方となることがある。例えば、車のナンバーは車全体からすればその一部であるが、ナンバーの機能は車を識別するためのものであり、むしろナンバーを参照点 R としその車を目標 T とすることで、車を同定しやすくしているわけである。

¹⁶ 例えば、関係名詞とは①社会的関係や職業上の関係を表す人間の名詞 (e.g. friend, boss など)、②より大きな実体の一部となるような名詞 (e.g. top, side など)、③何かの表象となるもの (e.g. photograph, story など)、④派生名詞 (e.g. singer, dancer) などである (cf. Taylor 2002)。

¹⁷ もちろんここには「推論」(inference) という認知プロセスが関与していることであろう。

¹⁸ 動詞と派生名詞 (nominalization) の関係は Langacker(1987c) で詳細に論じられているので参照のこと。

¹⁹ 2つのネクサス間の関係は概念的依存 (conceptually dependent) な関係であるが、Jespersen (1933) の言葉を借りれば「従属ネクサス」(dependent nexus) ということになろう。

²⁰ ここでは「統語の圧縮」という統語上の観点から「直接的」と「間接的」

について説明しているが、意味論的に言えば、「図像性」(iconicity) が関与していると思われる。図像性の観点からの議論に関しては稿を改めたい。

²¹ 無生物主語から人間の目的語に力の流れが感じられるひとつの理由は責任性 (responsibility) (cf. Lakoff 1977) が関与しているように思われる。つまり「人」よりも「無生物」に行為の責任があると感じられる場合や「人」が責任を逃れたい場合に「無生物」に行為の責任を押し付けてしまうように仕向けるために無生物主語構文が好まれるということになるわけである (cf. 小島: 1988)。

²² 英語は「人間中心」であり一見すると無生物主語構文とは矛盾しているように思われるが、無生物主語構文の無生物主語は「擬人化」して解釈されることを考慮すれば、矛盾するわけではないのである。

<参考文献>

- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』東京: 大修館書店.
- 安藤貞雄. 2007. 『英文法を考える』東京: 開拓社.
- 荒木一雄(編) 1997. 『新英文法用例辞典』東京: 研究社.
- Chamberlain, Basil Hall, 1971. [1905.] *Japanese Things: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan*. Tokyo: Charles E. Tuttle Company. (高梨健吉 (訳). 『日本事物誌 2』東京: 平凡社.)
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説』東京: 金子書房.
- 濱田英人. 2010. 「出来事の「主観的／客観的の把握」と英語教育」札幌大学教友会第27回英語教育研修会. 公演ハンドアウト.
- Hinds, John. 1986. *Situation vs. Person Focus*. 東京: くろしお出版.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』東京: 大修館書店.
- 池上嘉彦. 1989. 「『名詞的』なもの」と『動詞的な』もの」『月刊言語』9月号. 44-49.

- 池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚』東京: 日本放送協会出版.
- Jespersen, Otto. 1964. [1933.] *Essentials of English Grammar*. Tuscaloosa and London: The University of Alabama Press.
- Jespersen, Otto. 1984. [1937.] *Analytic Syntax*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』東京: くろしお出版.
- 葛西清蔵. 2003. 『英語学演義』東京: 現代工学社.
- 柏野健次. 2010. 『英語語法レファレンス』東京: 三省堂.
- 木村哲也. 1993. 『英語らしさに迫る』東京: 研究社.
- 国広哲弥. 1967. 『構造的意味論』東京: 三省堂.
- 国広哲弥. 1970. 『意味論の諸相』東京: 三省堂.
- 国広哲弥. 1971. 「日英語比較論」『英語文学世界』11月号.
- 国広哲弥. 1974a. 「人間中心と状況中心」『月刊 言語』2月号.
- 国広哲弥. 1974b. 「日英語の表現体系の比較」『言語生活』3月号.
- 久野璋. 1978. 『談話の文法』東京: 大修館書店.
- 小島義郎. 1988. 『日本語の意味 英語の意味』東京: 南雲堂.
- Lakoff, George. 1977. "Linguistic Gestalt." *CLS* 13. 236-287.
- Lakoff, George and Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1986. "An Introduction to Cognitive Grammar." *Cognitive Science* 10. 1-40.
- Langacker, Ronald W. 1987a. *Foundations of Cognitive Grammar, vol.1: Theoretical Description*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1987b. "Grammatical Ramifications of the Setting / Participant Distinction." *BLS* 13. 383-394.
- Langacker, Ronald W. 1987c. "Nouns and Verbs." *Language* 63. 53-94.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter.

- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4. 1-38.
- Langacker, Ronald W. 1997. "A Dynamic Account of Grammatical Function." Joan Bybee, John Haiman, and Sandra A. Thompson (eds.). *Essays on Language Function and Language Type Dedicated to T.Givón*. 249-273. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 2001. "Dynamicity in Grammar." *Axiomathes* 12. 7-33.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Leech, Geoffrey. 1974. *Semantics*. New York: Penguin Books. (安藤貞雄(訳) 1977. 『現代意味論』東京: 研究社.)
- 益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法—改訂版—』東京: くろしお出版.
- 中島文雄・毛利可信. 1957. 『高等英文法』京都: 山口書店.
- 中村芳久. 1998. 「認知類型論の試み: 際立ちVS. 参照点」『KLS』18. 252-262.
- 中村芳久. 2003. 「言語相対論から認知相対論へ」日本エドワード・サピア協会『研究年報』 No.17. 77-93.
- 中村芳久. 2004. 「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」中村芳久(編)『認知文法論Ⅱ』 3-51. 東京: 大修館書店.
- 中村芳久. 2006. 「言語における主観性・客観性の認知メカニズム」『月刊言語』5月号. 74-82.
- 中村芳久. 2008. 「認知モードの射程」坪平篤郎・早瀬尚子・和田尚明(編)『「内」と「外」の言語学』 353-393. 東京: 開拓社.
- 中村芳久. MS. "De-subjectification as a backstage cognition to explain various linguistic constructions." 金沢大学.
- 夏目漱石. 2007. 『文学論』(下) 東京: 岩波文庫.
- Nisbett, Richard. 2003. *The Geography of Thought*. New York: The Free

Press. (村木由記子(訳). 2004.『木を見る西洋人 森を見る東洋人』東京:
ダイヤモンド社.)

西光義弘. 2010.「「する」言語と「なる」言語を考え直す」「くろしお言語大学塾」
ハンドアウト. (<http://www.gengoj.com/index.php>)

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985.

A Comprehensive Grammar of the English Language. London: Longman.

Taylor, John R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

月本洋. 2008.『日本人の脳に主語はいらない』東京: 講談社.

山梨正明. 2000.『認知言語学原理』東京: くろしお出版.

吉川美夫. 1950.『英文法要説』東京: 文建書房.

<辞書>

Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary. 3rd ed.

Longman Dictionary of Contemporary English. 5th ed.

『岩波古語辞典増訂版』